
とある転生の追跡封じ[ルートディスタープ]

QWERT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある転生の追跡封じ「ルートディスタープ」

【Nコード】

N0200Y

【作者名】

QWERT

【あらすじ】

【とある魔術の禁書目録】を愛読する19歳の女子大生、小山川未緒の平凡な人生は、ある日を境に大きく変貌する。彼女の姿は、気がつけば――。

似ても似つかない人物に憑依してしまった未緒は、見知るも見知らぬ世界で陰謀の渦に巻き込まれていく。

page・01 Mio Koyamakawa (前書き)

拙い文章ですがよろしく願います

こやまかわ みお

小山川未緒、19歳。

某公立大学に在学中。

特技、特になし。

得意科目、現代文。

生活態度、概ね可。

回転寿司、ファミレス、コンビニエンスストアにてアルバイト中。

一人暮らし。

趣味、読書。

A・どんな本を読んでいますか？

Q・【とある魔術の禁書目録】です。

——とある転生の追跡封じ——

「だあー、疲れたあ」

深夜0時過ぎ、ハードスケジュールなアルバイトを終えた未緒は、学生寮のベッドに飛び乗った。大学生になり一人暮らしになった彼女は、如何に仕送りに依存せず生活できるか、を研究し、結局このようなハードな環境に身を置いている。このままシャワーも浴びずに寝入ってしまいそうだが、仮にも女である自分がそれをするのは、

色々、アレだろう。

と、いうわけでシャワーを浴びてベッドに戻ってきた彼女は、スレンダーな代わりに恵まれない胸元に手を当てて、ハアとため息をついた。

「胸が欲しい」

率直だった。

大学生にもなつてこの薄さはさすがに虚しい。まさしく貧乳と呼ばれるに相応しい未緒はもう一度ため息をつく、本棚から一冊の本を取り出した。

【とある魔術の禁書目録 3】。

茶髪のそっくりな女の子が二人映っている表紙を見て、未緒はしおりが挟んであるページを開き、読み進める。これは最近動画サイトでアニメを配信していたこともあって読み始めたものだ。魔法、物語の中では魔術と呼ばれる不思議な術と、科学的に解明された超能力を研究する街。そんな結びつきようのなさそうな二つを見事に整合させたこの作品に惹かれ、最近原作も買い集めるようになった。ちなみに彼女が読んでいる巻はネットでも大人気のキャラクター、アクセラレータ一方通行が出てくる巻である。

その強さに感嘆の声を漏らしつつも、やっぱり許せんと憤り、ちよっぴり可哀想に思えたり。ライトノベルを読むのは初めてだが、なかなか面白い。

未緒は知らず知らずのうちにその作品に惹かれていった。

その翌日のこと――。

『ニユースをお伝えします。本日午後11時頃、神奈川県内の路上にて大学生が大型トラックに跳ねられ死亡。遺族は――』
『

page 02 She looked at herself in a m

『鏡に自分を映してみた』

「……………う、う？」

瞼を開けると、そこは見知らぬ天井だった。白い部屋だ。どうやらどこかの病室らしい。ぼんやりとした意識の中、未緒は辺りを見回してみる。

人の姿はない。

（確か私、横断歩道でトラックに突っ込まれて――）

死んだかと思ったが、こうして目を開けて病室を見回せるのだ、何とか助かったのだろう。

（お父さんとお母さん、心配してるかな…寝てる間にお見舞いとか来てくれたのかな…って、あれ？）

妙だと思った。

交通事故に遭ったというのに、手足の感覚はしつかりあり、布団の中で動かせた。かと言って、頭が痛いということもなく、ぼんやりとしてはいるがしばらく寝た後の感覚に似ているし、交通事故の影響ではない。

でも病院には居る。

（……………なんで？）

と、ここまできて。

未緒はそれに気付いた。

視線を下げた時に、それは視界に入り込んだ。

ベッドに横になった状態で、自分のお腹を見るようにした時に。

シーツを大きく押し上げる塊が二つ、自分の胸の上にある。

まさか、と思いつつ、未緒はシーツをめくってその正体を確かめる。それは自分が身につけているピンクの病室着で、二つの塊はゆったりしているはずのその中ではちきれんばかりに自己主張していた。

ちょっと待ってくださいな。

（私、確かAカップだったよね……？）

悲しくなる薄さだったそれが、どうしてこんな、カップ数なんてわからないけどとにかくなくなっているのか。

あれほどのスピードで突っ込んできたトラックにぶつかって無傷なことと関係があるのか？

妙な焦燥感を覚えながら、未緒はひとまずベッドを降りることにした。離れたところに鏡が見えたからだ。胸の重みに違和感を感じつつ、用意されていたスリッパを履いて立ち上がる。

……視界が高い気がする。

恐る恐る、未緒は鏡に自分を映した。何故か爆乳になっていて、身長も高くなったように感じる自分を。

「……は？」

ぽかんと口を開けて、未緒は鏡に映った姿に絶句した。だがそれも当然だろう。

映っていたのは平凡な黒髪の東洋人の顔ではなく、艶やかな金髪と青い瞳を持った、とんでもない美人だったのだから。

そしてこの顔には、覚えがある。

そう、それはアニメの【とある魔術の禁書目録？】に出てきた（原作はそこまで読んでいない）、金髪碧眼の運び屋魔術師。

オリアナ・トムソンの姿だった。

page・03 First contact With Last order

『○○との初対面』

「え、ちょ、これ、え？どどどどどなってるの？」

声に出してわかる。これは小山川未緒の声じゃない。かといってアニメのオリアナの声でもない。いや、自分の聞いている自分の声と他人の聞いている声とでは違うというし、自分以外の人からはオリアナの声に聞こえるのかもしれない。鏡の中のオリアナ「トムソンは劇中の余裕のある表情どころか、純粹に慌てた様子でオロオロしていた。改めて、小山川未緒が今はこの姿であることを実感させられる。」

と、まあわけのわからなかった未緒だが、そこはやはりアニヲタの気のある女子大生。時を追うごとに、冷静さを取り戻し、可能性をひとつ思いつく。

「これはいわゆる……『転生』ってやつ？なのかな？」

よくあるテンプレというか、二次創作小説なんかではよくある展開だ。三次元に住む人間が死んで二次元世界に迷い込んだり劇中の登場人物に憑依したり。自分は後者に当たるのだろうが、転生はあくまでも架空の展開であって、現実の転生は来世で再び生まれることを意味するわけで、よもや現実にこの種の転生が起ころとはなかなかには信じがたく。

（……ひょっとして、トラックに跳ねられる少し前から夢だったたり？）

そう思って、自分のものとは思えない滑らかな白い頬を、細く長

い指で抓る。

「痛……」

普通に痛かった。夢から覚めることもない。どうやらこれは、いよいよ、本気で転生したことを認めなくてはならない流れらしい。なんだかもう、何をどうしていいのかまるでわからない。姿形声色がオリアナでも、未緒は劇中のオリアナのように魔術なんて知らないし、従来のオリアナ「トムソン」として活動することも難しい。かと言って一度死んだ（？）世界に戻れるとは思えないし、さてさてどうしたもんか。

（ひとまず状況を確認しないと）

いつまでも鏡と向き合っていても仕方ない。未緒はベッドの傍に置いてあったカレンダーに目を向けた。

9月20日。つまり劇中で上条当麻とオリアナ「トムソン」が戦った日の翌日、大覇星祭の二日目だ。あの後には手当てか何かのために病院に運ばれたのだろうか？というか、理由があつたとはいえあれだけのことをすれば、警備員アンチスキルに捕まっていそうなものだけど。

「魔術使って避けたのかな？それにしたって、こんな表立った病院に寝てるってのも変な話よね」

何か裏があるんじゃないかと思ってしまう。特にこの学園都市では10日後、『神の右席』のヴェントさんが侵入したりするわけだし、小山川未緒をオリアナに憑依させて未来を変えよう、なんていう巨大な意志も感じられる。……だから不都合な事情はパス、ともはやこの時点でパラレルでは？

むむ、と首を傾げ、小山川末緒改めて新生オリアナ「トムソン」はベッドに座る。二次創作のテンプレと違って、自分で憑依先を決められなかったのが違和感の正体かもしれない。

……まあ、美人さんだったのは嬉しいけど。

着ていた病室着だが、上と下とでサイズは違っていた。こういったものは上下セットでサイズが決められているはずだが、日本人からして規格外な胸に反して見事なくびれを持つグラマー＆ナイスバディにはサイズの違う二着をあてがう他なかったようだ。なので胸元は窮屈そうなのに胸から下、袖口はぶかぶかという何とも奇妙な絵になっている。おそろべし、オリアナ「トムソン」。

少し喉が乾いたというのもあって、オリアナは病室を出て自販機を探す。何気なく廊下を歩いているだけなのに、すれ違う患者さんは足を止めてオリアナに釘付けになっていた。中には鼻の下を伸ばして妻か彼女かに咳払いされている人もいる。基本地味子さんだった末緒からすれば新鮮な体験でちょっぴり嬉しいと思う反面、無性に恥ずかしくもある。

そんなこんなで休憩スペースまで辿り着いたオリアナは、多分自分のものだろう財布（病室の机の上に置いてあった）から両替済みの小銭を取り出し、当たり障りのない緑茶を購入して近くのソファに腰掛ける。

緑茶をごくごく飲み干す外国人って粹だなあなどと思いつつ、乾きを潤して冷静になる。

（なったからには仕方ない、何とかオリアナでやってける方法を探そう）

病室の外に出たことでここが日本であることがわかり、少々希望が出てきた末緒。自分にはなかった綺麗な金髪を撫でてみて、自信を持つ。

と、そこで、オリアナは見覚えのある姿を目撃した。

自販機の前に小さな影。頭のとっぺんでぴんと立っている茶色い髪。空色のキヤミソールを着た女の子。遠目にその後ろ姿を見ても、誰なのかはつきりわかる。

小銭を入れて、とりあえず背伸び。届かず、ぴよんぴよんと跳ね出して、やがて唸りながらうなだれて、また跳ね始める。行動からして子供。オリアナは立ち上がり、女の子が跳ねている横のゴミ箱に緑茶のペットボトルを入れる。

オリアナが長身というのもあるのだろう、女の子の頭はオリアナの胸にも届かない。そんな女の子の正体を知る新生オリアナ「トムソンは、劇中ではあまり見られない笑顔を浮かべて、

「どれが飲みたいの？お嬢さん」

「ミサカはあの一番上の果物の絵が描いて……って、突如現れたこのおっきなお姉さんは何なの！？ってミサカはミサカはミサカの頭より大きそうなブツを見て驚愕してみたり！！」

やっぱり打ち止めか。ラストオーダーアニメ一期でアクセラレータ一方通行に助けられて二期で

癒やしを与えつつ色んな目に遭った子だ。原作ではまだ見てないけどやっぱ可愛い。ってことはこの病院、あのリアルゲコ太こと冥土ヘブンキラストオーダー帰しの病院なんだ。打ち止めが居るってことは一方通行もいるのかな？

「これ？」

パンパンに張った胸元を凝視している打ち止めに笑いかけながら、最上段のフルーツジューズを指さすと、フリーズしていた打ち止めラストオーダー

はこくりと頷き、出てきたジュースを嬉しそうに手に取った。

さて、とオリアナは病室に戻って豊満過ぎる胸の下（前だと組みづらかった）で腕を組む。この世界の癒やしとちよつとの間戯れて元氣が出たところで、具体的に方針を定めようと思う。

まずは資金繰りから始めなくてはならない。怪我といっても劇中のダメージはそげぶだけだったこともあり、体に痛みはまるでない。というか、そげぶされた頬にすら痛みを感じないあたり、憑依した時点であらゆるダメージがリセットされた感じかもしれない。

財布と一緒に何故か置いてあった紙袋の中身は着替えと速記原典。ショートハンド

魔術を知らない未緒からすれば迂闊に触れないアイテムだ。ちなみに着替えの方は、あのヒラヒラしたものがついたスカートとも言えないスカートと劇中にも出てきた露出度MAXな腹出しキャミソール。下着はパンツだけでブラはなかった。オリアナさんには悪いけど買い足させてもらう。病院はすぐに出されるだろうし、いずれにしろお金が要る。まあこのカラダを使えばいくらでも稼げそうだが、中身は純粋な大和撫子なのであまりはしたないことはしたくない。

「まずはバイトでも探そうかなあ……」

いや、学園都市の中ではそんな活動はできまい。まずオリアナ「トムソンは外部の人間なのだから。頭を捻っていると、急に部屋が静かになった。風が止んだ、というのか。さっきまで聞こえていた街からの色々な音が消え、正真正銘『無音』になったのだ。

「なに……?」

この世界はあのとあるの世界だから嫌な予感しかしない。すると、いつの間にやらずぐ傍に、髭の長い老人の姿が見えた。

「やあ、小山川未緒くん」

と、優しく口に出しながら。

page 04 enter into a contract with

『神様と契約』

「やあ。って、誰ですかあなたは」

目の前に現れた老人に対して、未緒は警戒心剥き出しに問う。老人は「すまんすまん」と髭をなで、

「いきなりで驚いただろう。君を今の姿にした張本人、つまりまあ、君たちから見れば神様に当たる者だよ」

「神様？」

にしては登場が遅いんじゃないですか？もう登場人物の一人に出会った後ですよ。まあ、やっとテンプレをなぞれて一安心だけれども。

「まあ、儂の下の子が、おおっと、変な意味じゃないぞ、安心なさい。少し手違いを起こしてしまったらしくてのう。君を早死にさせてしまった挙げ句転生までさせてしまったようなのだ」

「よくわかりませんが、意図してやったとは思えないぐらい重大なミスを犯してますねその部下の人は」

「まあそう怒るでない。君はこの世界が好きだろう？転生してしまったからには取り返しもつけられん、頑張っておくれ」

「無責任過ぎでしょ！」

「いや、ホントにすまない。だがまあ、ちゃんと君の願い通りじゃないか。ほれ、こんなに立派な乳が」

「私のじゃないけど今は私なので触らないで下さい」

ぺしっ、と伸びてきた手を払うと、神様は少し残念そうにしつつ、

「ならば少しでもこの世界でやっていけるように、少し設定をいじってやるう。こんな感じでどうじゃ？」

・速記原典をサポート。

・オリアナ・トムソンを学園都市内の大学に籍を置いている設定にする。

・強能力者クラス的能力付与

「速記原典をサポート？」

「速記原典は魔術知識がなくては使えない。だから、速記原典を使用する際にだけ、深層意識に本物のオリアナ・トムソンを出す。君の行動指針に従ってイメージした魔術にもっとも近い組み合わせを感覚で導き出すことができるようになる。これで君も本物と見劣りしなくなる。まあ、判断能力まではサポートできんがのう」

つまり、深く考えずとも深層意識に現れたオリアナが術式を組んでくれる、ということか。

「……ほぼチートですね」

「まあ儂らの罪滅ばしじゃよ。さて、君の悩みの種は二つ目で払拭したことだ、どんな能力が欲しい？」

これは考え物だが、電気や風、火といったものは魔術でどうにかなりそうだし、ここはやっぱり科学サイドにかなさそうな能力を貰おう。

「じゃあ、『テレポート空間移動』で」

「テレポートか。残念じゃが、転移できるのは君自身だけになるがいいかね？それでよければ、レベル3の『シフトポイント座標転移』を授けるが」

「十分です。ありがとね、神様♪」

「むぐぐ、その顔は反則じゃぞ未緒くん……」

次の瞬間、神様は病室から消えていた。消えた音も元通りになっている。オリアナは訝しげに掌を見てから、念じるように目をつぶり。

フォンツ、と小さな音を立てて、ベッドから入り口付近へと転移した。

「……すっっ」

テレポートってこんな感じなんだ、と妙な感動を覚え、今度はベッド脇のローテーブルに目がいく。一冊の薄いファイル。中身は学園都市の身分証明書だ。そこにはオリアナの名前と出身国、そして

とある大学の名前が刻まれている。一緒に寮の住所などが描かれた書類もあった。

「……ご都合主義ご都合主義。優しい神様で良かったあ」

あっさり方針が決まり、オリアナは安堵のため息をついた。

page・05 trio of the skillout (前書き)

『スキルアウトの三人組』

早速オリアナは行動に移すことにした。今までは例の神様が糸でも引いていたのか、翌日にはあっさり退院を言い渡されたのだ。

胸だけ窮屈なぶかかな病室着を脱いで、オリアナは誰もいない室内で目を疑うサイズのブツを外気に晒す。上半身裸の状態でも型崩れしない当たり、さすが二次元と言うべきか。

彼女はスーツケースの中から19歳が履くとは思えない黒い下着を履くと、その上から原作にも出てきた見えそうで見えない帯のよなものがたくさん伸びるスカートを腰に巻き、既製品の裾を切ったんじゃないかと思う胸の下半分だけを隠す程度のキャミソールを身につける。着てみて思うが、これは服というより布なんじゃないだろうか。キャミソールはまだしもスカート(?)の方は結び目を解けばはらりと落ちてしまふに決まっている。

「覚悟はしてたけど、ホントにノーブラだったんだねオリアナさん……」

最優先購入目標がブラジャーってどうなんだろう。今まで見てきた二次創作の転生主人公の中でも極めて稀なケースのような気がする。まあ、多分世に言う『謎の密着力』で放っておいても大丈夫そうではあるが。

「そもそも、このサイズのブラって売ってるのかな？」

などなど疑問は尽きない。

着替えを終え、劇中通りの姿になったオリアナを鏡で見て、未緒はもう一度気合いを入れる。大丈夫、こちらには速記^{ショートハンド}原典と『座標^{シラト}ポイント

転移』がある。これだけチートなら話に聞く第三次世界大戦でも乗り切れるはずだ。

少ないオリアナの持ち物をスーツケースに纏め、それを引きながら部屋を後にする。

ラストオーダー
もう一回打ち止めに会えないかな、などと思っていたが、出歩いているらしくすれ違うこともなかった。

さて、まずは神様に都合合わせをしてもらった大学寮に向かうでしょう。そう言えば、一緒に来たはずのリドヴィアはどうしただろう。学園都市の大学生になったオリアナ「トムソンは魔術サイドとの繋がりを断ったことになるのか？アニメでは通信術式を組んで話をしていたけど、今それをしてもしリドヴィアは対応してくれるのか？正直原作四巻以降はアニメとwikiでしか知識を得られていないので、リドヴィアがああ後どうなったのかはわからない。

「んー、こうして見ると、学園都市ってやっぱり凄いやねえ」

映像としては見ていたが、こうして直にこの世界で清掃ロボットなどを目にするとうS Fを実感する。いい加減周りからの視線にも慣れ、未緒は劇中のオリアナのように堂々と繁華街を歩いていた。そんな時である。

「……………」

オリアナは人目を引く格好でスーツケースを掴んだまま、一点を見つめすいと目を細めた。視線の先には銀行がある。そこに、見るからに怪しい人物を発見したのだ。

というか、ある意味この世界に起こる先の展開を知っている未緒だからこそ怪しいと感ずるのだが。

「こんな時期から活動中、ね……」

まあ本編で語られていないところもあるだろうから不思議とまでは言えない。

オリアナ・トムソンが目にしたのは、三人組の少年たち。原作知識があればわかることだが、あれはスキルアウトの駒場、浜面、半蔵の三人組だ。確か原作では、『ATMを盗んだり』なんて発言をしていた記憶がある。今まさに、それが行われようとしているわけだ。

（ここでの行動次第で未来が変わる、とかだったらどうしようかな）

放置すれば原作の末路を辿るだろう。何気に駒場は好きだったりするし、できたら助けてあげたいと思うが、それなら10月のスキルアウト掃討作戦に食い込まないことには未来は変わらない。

と、そこで、オリアナは新たに登場人物を発見した。

ジャージ姿の巨乳警備員、^{アンチスキル}黄泉川愛穂だ。彼女の行く先はもちろん、銀行の三人組。そういえば彼女は彼らの宿敵だったか。

（……オリアナは外国人つてのもあるから納得いくとしても、あの人は反則な気がする）

日本人だった小山川未緒の体型を思い出して、オリアナははあとため息をついた。

折角の原作改変チャンスだったが、浜面たちの邪魔をするのもいい気分じゃないので放置。また歩き出してスニーカーを引っ張っていく。

ドンドンと大覇星祭の花火が上がる中、オリアナは道中発見した屋台でチョコ味のアイスクリームを購入していた。

寮は同じ第七学区にあるようだが、大学寮は端の方にあるらしく距離が距離なので、オリアナは屋台の立ち並ぶスペースの隅にある休憩所にて学園都市製アイスクリームに舌鼓を打つことにしたのだ。格好とスタイルのせいもあるのだろうが、未緒自身は普通に舐めているつもりなのに妙に艶めかしく映ってしまう。もう慣れたので気にしないが、こちらをチラチラと伺う男性たちの姿が目に入る。今は『見られても恥ずかしくない容姿』だからいいものの、転生前の自分なら慣れることがまずないだろう。

休憩所のテーブルを背に背もたれのないベンチから空にあがる火花を見つめていたオリアナだが、突如違和感を感じた。

「……？」

違和感を感じるのは丸出しのウエストの辺り。アイスを舐めながら視線を下ろすと、胸に反して細い腰に巻き付いているものがあつた。胸が邪魔してよく見えないが、見えないところを除く全体像を見てみると、それが誰なのか把握できる。白と金の、ちょっと高いコーヒークップみたいな配色の修道服に身を包んだ少女だ。とすれば、第一声は決まっている。

……せーの。

「……おなかへった」

タイミングを合わせたため、見事にハモる二人の声。そう、ヒロインのインデックスである。

大体の二次創作作品では上条さんの代わりに財布の中身を食い潰されてしまう展開だが、正直手持ちはあまり多くない。近いうちにバイトでも探さないとすぐに無くなってしまいそうなくらいには。

「…あなたはどうしてもわたしの思考を読み取ることができるの？」

「それはお姉さんの特殊能力つてことで。アイス一本くらいなら買ってあげられるけどそれでもいい？」

インデックスには悪いが、お金がないことには仕方ない。だが、それでもインデックスは「食べる！！」と食いついてきた。

ぐうう、という情けない音が、インデックスのお腹から聞こえてくる。言うまでもない、十万三千冊の魔導書を維持するために必要なカロリーはとんでもないのだ。たかがアイス一本、一口で飲み込んでしまった。可哀想だが、こちらはこの世界に口座もないし仕方ないものは仕方ない。何かを訴えるような瞳でインデックスがこちらを見ているが、それでも関係ない。関係ないっただけ関係ない。関係関係関係関係関係関係関係ないっ！！

すっからかん。

日本語って便利ね。状況を的確に尚且つ抽象的に表現できる不思議な魅力に満ちている。

「……生活できない」

これはいよいよ本当に体を張って稼がなくちゃならないかもしれない。大学は奨学金が出るのかが気になるところよね、うん。

仕方ないので、近くのコンビニにあった小冊子の求人情報に目を通す。残金は本当に少ないが、今が21日なので給料日は四日後。頑張って働けば2000円は稼げるはずだ。

折角オリアナになったというのに、考えることは未緒のころとそんなに変わらない。できることなら、経験のあるバイトを選んだ方がいいだろう。

と、いうわけで。

「。。。大学のオリアナ」トムソンといいます。よろしく願いします」

とあるファミレスの裏方にある応接室には、かなり危うい格好の金髪女性が堅物そうな中年男性と机を挟んで向き合う、というとてもシユールな光景が広がっていた。

堅物そうとはいえ中身は男、布の面積が肌より少ない外国人の大きな胸に釘付けとは言わずとも気になっている様子だ。オリアナとてできればしっかりした服装で面積を受けたかったが、オリアナの手持ちがみんなこんな感じなので仕方ない。買い足す余裕もヒロインにかっさらわれてしまったのだから。

「ん、ごほん！オリアナさんね……ちら……日本語はどれくらい使

えるのかな？……ちら」

「日本で育ったのでむしろ日本語しか使えません。漢字は検定2級とってます」

「あー、そうなんだ…ちら…週にどれくらい入れる？…ちらっちらっ」

……異世界といっても面接の形式は変わらない。一度採用されたこともあって、割とすんなり採用してもらえた……が。

「店長すみませーん」

「ん、どうかしたの？」

「もう一段階大きいありませんか？きつくてきつくて」

胸が。

「ないことはないけど、んと、ソッチに合わせると腰の方が緩くなったりしないかな？」

「いやあ、このままだと私だけでなく色々あると思うんですね」

と何の気なしに胸元がパツパツに張ったウエイトレス姿を店長に晒す。この上にエプロンもつけることを考えると、白という膨張色の後押しを受けて普段の格好以上にイヤラシイ気がする。店長は数秒鼻の下を伸ばした後、咳払いとともにワンサイズ上の制服を渡してきた。

（まだ苦しいけどこれでいいかなあ。膨らんじゃうのは仕方ないとして）

さっきよりは布地に余裕があるので良しとする。できたら第三くらいまでボタンを開けたいがそうもいかないだろう。

9月21日夕方より。

ファミレス店『オリヤ・ポドリータ』は、大混雑を迎えることになる。

page・07 mysterious twins (前書き)

『怪しい双子』

「なるほど……わからん」

9月30日、とある大学のゼミ室で、オリアナは思わず呟いた。格好は数日前と比べてかなりおとなしめな、露出の少ない格好である。オリアナの私服だけでは間違いなく不審者扱いされそうだったので、後から買い足した安物だ。ついでに念願のブラ（案の定特注）も手に入れ、やっと落ち着けたところである。まあ大きいことに変わりはないし、容赦なく拘束する衣服を膨らませているのは相変わらずではあるのだけど。

（さすがは学園都市、何が何だかわからない……。学業についてはあんまり期待できないなあ）

さて、今日はもう9月30日なわけだけど。

（先を知つてると、妙に緊張感があるようでないんだよねえ……）

もちろん、できることなら主人公勢に協力したいところだ。ただどう考えても、一方通行には面と向かって協力できない気もするし、ここはやっぱり正統派の上条に協力する形でいくべきか。

（肝心の速記原典ショートハンドもまだ使っていないしなあ。使うとしたらやっぱり獵犬部隊か）

あの人達の場合は自業自得がほとんどだし、ちよいとオリアナお姉さんが罰を与えてあげるのも悪くないかもしれない。

すべての講義を終えたオリアナは、足早に大学を後にしバイト先のファミレスに駆け込んだ。

オリアナがバイトするようになってから客足が一気に増えた『オリア・ポドリータ』では、オリアナがシフト入りする六時前後から客が一気に増えているらしい。

「お、トムソンさん。今丁度人が増え始めたところなんだ。早く着替えて注文取るの手伝ってあげて」

「はい」

店長にそんな声をかけられてから、一人更衣室に入りお着替えタイム。あつという間にメイドさん意識な制服に着替え終え、フリルの力チューシャを頭に着ける。鏡の中に映る、『ありえないオリアナ』の姿にちよつと目を奪われそうになりながら、彼女は更衣室から店内へと入っていった。

「えつと、30番席30番席…」

現実ならありえない短さのスカートから白く長い脚を露出させて、オリアナはツカツカと靴音を響かせながら通路を歩く。直に目を這わせる者もいれば、ファミリーテーブルなどの透かし越しにこちらを伺う者もいる。まあ、オリアナ目当てで来ている客が半数だろうから仕方ない。不思議と、見られているのは地味子・未緒ではなく美女・オリアナと思うと全く恥ずかしくない。本物みたいに大胆な服を買ってみようか、と思うくらいには。

「お待たせしました」

営業スマイルと共にテーブルに運んできたステーキを置くと、その笑顔のために視界が狭まる一瞬の間に、目の前に座っているはずの客の姿が消えた。

え、と目を見開くと、次の瞬間、オリアナは真後ろからの声を聞いた。

「姉ちゃんパンツ丸見えだぞ」

「はあ!?!」

あわててお尻を押さえる形で振り向くと、そこにはオリアナ同様金髪の少年の姿があった。年齢は10歳くらいだろうか。ラストオーダー打ち止めと同じくらいの、やろうと思えば簡単に運んでやれそうなサイズだ。そんな子供が、しゃがみ込んでスカートの中身を覗き見たという状況である。

（そんなローアングルから覗き込んで丸見えも何もないでしょうに）

見られたことよりそういうツツコミの方がしなくなる。

オリアナは一回ため息をついて、伝票をテーブルに置いて少年に軽く注意してやろうとしたのだが、それより先にステーキの向かいに座る人影が目についた。こちらは少年とよく似た金髪の少女だ。双子なのだろうか。パンツ覗き魔の少年とおとなしそうな少女の他に保護者らしき人間はいない。すると少女は覗き魔の少年を睨みつけ、

「ラフティ、そのウエイトレスさんが気になるのはわかるけれど人

の目を気にしてほしい」

「へいへーい」

軽い調子で返事をする、少年はオリアナの脇を抜けてステーキにがつつき始めた。こんなキャラクターには覚えがない。エキストラにしてはキャラが濃すぎる気もするし、何者なのだろうか…。

（つと、バイト中なんだった）

ついボーツとしてしまい、オリアナは慌てて注文を取るためにその場を後にした。

「で、あいつなんだろう？オリアナ＝トムソンって」

「ええ、間違いない」

「思ったより簡単に見つかったな、ユニア」

賑やかな店内で掻き消された、幼い声を背にして。

そろそろ真面目にストーリーを組んでいこうかと思って、新キャラ登場です。このまま自己満小説にはしたくなかったので（笑）

余談。巷ではバストイズ104などと言われてるオリアナですが（正確にはbasis104）、実のところどうなんだろう。作者と言う名の変態である私は気になって仕方ない。巨乳だなんだと言われても100の上台を超えるキャラは滅多にいないが、オリアナは作画によつては本当に104いってそうだから怖い。いってたらいつたでああその、小説を書く上での資料が増えていいんですが。まあとりあえず104と思って小説書いてます。104であのくびれはやばい。変態でごめんなさい

『彼女が会える主人公』

不思議な双子が座っていた席は、1時間後には別の客が座っていた。

あのラフティという少年がただの女好きのマセガキならいいのだが、もう一人の女の子といい雰囲気は普通とは違っていたところから考えると、嫌な予感がする。

（まず私がここに居ること歴史が変わってる、とか？笑えないぞ、おい）

頭の中はもう彼らのことで一杯だった。体で覚えたようなもので、業務に支障は出ていないが接客態度が少し問題かもしれない。

オリアナは目を覚ますように顔を左右に振って、なるべく双子のことを頭から離すようにして注文をとりに行く、その時だった。

ガチャン！

それなりに広い店内に、陶器の音が反響した。

「お客様！？」

オリアナと同じくここでバイトしている高校生が、頭からテーブルに落ちた客のところへ向かう。

オリアナは冷静だった。この展開を、未緒は画面越しに目にしたことがある。

（天罰術式…）

音は連続した。一人、二人、三人、四人。店内の客が、次から次へとテーブルに突っ伏していく。

「お、オリアナさん！どういことなんですか！？これ！！」

バイトの高校生ウエイトレスは涙目になりながらオリアナのもとに駆け寄ってくる。すぐに、厨房の従業員や店長もオリアナたちの立つ通路にやって来た。

「食中毒とかじゃ、ないよな…？」

店長が調理担当の従業員に目を向けるが、無実の従業員はぶんぶんと首を左右に振った。

「料理を食べてない人まで意識を失っているんですよ？」

オリアナが胸の下で腕を組んで店長を諭すと、バイトの高校生が、

「オリアナさん、ずいぶん冷静ですね…」

「みんなでパニックになってたって仕方ないし、誰か一人でも落ち着いて思考していないと、いつまで経っても解決できないじゃない？」

高校生に微笑むと、彼女は顔を赤くしてもじもじし始めた。薄々感づいてたけどこの子はちょっとアブノーマルなタイプかもしれない。

（私はヴェントの事情も知ってるし、天罰術式の影響を受けずに済みそうだけど…）

多分、たった今他の支店に連絡を取り始めた店長を始めとするみんなは、客たちと同じようにそう時間をかけない間に…。

「えっ？侵入者って、どういうことなんだ？」

…どうしたもんか。

この場での被害を未然に防ぐのは簡単、ここにいる意識のある人にニューズなどの情報を得ないように徹底させればいい。だが、彼らは末緒とは違って学園都市の外にある魔術なんて眉唾としか思わないし、今やただのアルバイト女子大生のオリアナの言うことなどまともに信じてはくれないはずだ。現に、電話に応じた店長はたった今床に倒れてしまった。

（…天罰術式は対象を殺す効果はない。あくまでも仮死の誘発だから、他のお客さんと同じで放っておいても大丈夫なはず…）

「て、店長！大丈夫ですか！？侵入者って一体…うつ」

「柚羽ちゃん、大丈夫…かはっ」

「……………」

あっという間に、意識のある人間はオリアナだけとなった。ここへ来て、オリアナは自分の脚が震えていることに気がついた。ついさっきまで、仕事の同僚たちが居たときはこんなことはなかったはず、なのだけど。

「……やば、ビビっちゃってるや」

彼女はメイド服をイメージしているらしい制服のポケットに手を入れて、速記原典を取り出した。それをギュッと握りしめ、なんとか震えが止まるよう努める。

自分には無限の可能性を秘めた速記原典と、半径50mの範囲を自由に転移できる能力がある。しかも、ヴェントに対して天罰術式を恐れる必要はない。何を怖がるって言うんだ。

そうしてオリアナが立ち上がるうとした瞬間、

「ここもかよ…」

聞き覚えのある声が聞こえてきた。画面越しに見ていた末緒はもちろん、末緒が憑依しているオリアナにしても忘れ得ぬ声であろうその主は。

（上条さんっ!?!）

待て待て、ってことはこのファミレスがアタリなんですか!?

数あるファミレスの中でよくもまあピンポイントに災難エリアに引っかかるものだ。

転生・憑依系展開の主人公的な位置にいるからには避けられない運命だともいうのか。

今からぼちぼち上条に加勢するつもりで居たオリアナは、予想できたはずのまさかの展開にテンパっているところである。

ラストオーダー
「打ち止め、とにかく外に——ッ」

ひゅつ、と背筋を冷たい感触が駆け抜けた。

一瞬後、オリアナの耳の中に強烈な破壊音が響き渡り、細かな破片が飛び散る音が連続する。電気が消えた。視界が一気に暗くなる。未緒は勇気を振り絞り、家族席と家族席を仕切るモザイクのかかった壁から獵犬部隊と上条たちの位置を確認して、立ち上がると、

ハウンドドッグ

（何でもいいからあいつらを気絶させる術式を…！）

奇妙な感覚が始まった。手が勝手に、だが頭の中で何をしているのかはつきりと理解しながら、自動と手動の中間のような感覚で速記原典を扇状に開き、その上から3枚目、下から17枚目のページを引きちぎる。

引きちぎったページに、紫と緑の文字がそれぞれ浮かび上がった。そして。

「っあっ！？」

獵犬部隊の方から声が上がった。どんな変化が起こっているのかは知らない。それより早く、オリアナは上条と打ち止めのすぐ後ろに移動して、何かと確認しようとする上条の頭の後ろから手を回しその口を塞いだ。

「もっ、もがつ！？」

「シー…」

唇に指を当てて、オリアナは上条の耳元で囁いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0200y/>

とある転生の追跡封じ[ルートディスタープ]

2011年11月18日08時15分発行